

人のために豊かさや便利さを提供する  
土木を、生活のなかに浸透させていくこと。  
「DOBOKU×カルチャー」  
では、私たちと土木の距離を縮めてくれる、  
そんなコンテンツを紹介します。

## 第24回 『浮世絵⑥』

### ～江戸市民にとっての富士山

東京から新幹線に乗り西へ向かっている途中、車窓から見ると圧倒されるだけでなく、なんだか得したような気分になる。日本のみならず世界各国の人たちもその魅力に取りつかれてしまう日本の名峰、富士山。激しい噴火を引き起こしていた古代から日本の象徴であったが、特に江戸時代は、信仰と憧れの対象として多くの市民が登山に訪れるほど大きな存在感を放っていた。葛飾北斎の『富嶽三十六景』に代表されるように富士を描いた多くの作品が今も世界で注目を集めているが、今回はあえて富士山そのものではなく、土木の観点から「富士塚」について触れてみたい。

### 爆発的に流行した富士講

浮世絵に描かれている「富士塚」について紹介する前に、江戸時代の市民が富士山をどのように捉えていたのかについて紐解いていこう。数百万年もの前から火山活動が盛んだった富士山の周辺一帯。縄文時代には4回の爆発的噴火をするなど、古くから恐れられる存在でもあった。江戸時代にも1707（宝永4）年に大噴火があり、大量の火山灰が江戸市中まで降ったといわれている。人知を超えた活火山である富士山に対し、日本人々は恐れをいだくと同時に、神の存在を思わずにはいられなかった。富士山が万物を生み出す根源ともされた。また、富士山麓には、噴火によってできた溶岩洞穴が数多く存在し、その洞穴に富士の神である浅間大菩薩が出現したという伝説もあり、富士信仰が芽生えていった。

江戸後期になると、富士山麓の洞穴で千日間の修業をしたという長谷川角行によって民間宗教である「富士講」が創出された。さらに食行身禄によって富士講は江戸市民にまで拡大していき、大衆化されていった。富士講は講や講中という団体をつくり、枝分かれをしていき「八百八講」といわれるほど広がっていった。それは江戸幕府が規制をかけるくらい爆発的な流行だった。



歌川広重作「名所江戸百景」より『目黒新富士』。目黒では、この「新富士」と「元富士」の二つが代表的な富士塚として知られた。新富士は1819年に択捉島探検で名をさせた近藤重蔵が邸内に築いたもの。東富士、近藤富士とも呼ばれ、1959年まで残っていたが、その後取り壊され、現在その姿はない。（所蔵：国立国会図書館）

江戸市民は信心深く、富士山に出向き「富士参詣（富士参り）」を行った。しかし、白装束に身を固めた行者スタイルでの富士登拝は、危険を伴いお年寄りや女性などにとって厳しい長旅となった。そこで、江戸各地の寺社境内などに富士山を模した山を岩や土などで築き、富士参りの代わりとした。その山が「富士塚」である。

### 心の平安を保つための富士塚

富士塚は、1779（安永8）年、高田の植木職人、藤四郎が師である身禄の追慕の記念として水稲神社境内に溶岩で山を作ったことに由来するとされる。江戸市中には、富士塚が70以上も作られ浅間神社が祀られた。富士塚を登り、浅間神社をお参りすることで、実際に富士山に登って参拝したことと同じご利益があるといわれた。

歌川広重の「名所江戸百景」の『目黒元不二』『目黒新富士』には、富士塚である元富士、新富士を手前に配し、はるかに本物の富士山を望む構図で描かれている。「元富士」は1812（文化9）年に地元の富士講の人々が築いたもので、高さは12mもあった。その後「新富士」が1819（文政2）年に造られ、江戸の富士塚の中でも特に見晴らしがよいとして知られた。本物

の富士山を眺めながら、富士塚に登る姿が容易に想像できるだろう。

都心にある鐵砲洲稲荷神社には、境内の北西に「富士塚」がある。明治時代に再築造されたものだが、富士山の五合目以上の姿を模したもので、山腹全体は富士の岩肌を表現するように黒ぼく石（富士山の溶岩）で覆われている。高さは、約5メートル・面積は約95平方メートルの富士塚には、自然石で造られた「く」の字形の登山道が設けられている。山頂には、富士浅間神社の石祠が祀られている。また、山腹には富士講に関する32基の石碑があり、富士講が盛んであった様子が伝わってくる。実際、豊国、広重作の「江戸自慢三十六興 鉄砲洲いなり富士詣」には、富士塚の中腹に日傘を差した人物が描かれている。

江戸の庶民にとって富士塚に登ることは、日々の疲れた心を洗い流し、心の平安を求めるものだったろう。そして、生きる力を更新し、明日からの生活を営むための原動力になっていたにちがいない。富士山をお参りするのが困難なら模した山を造ればいい。江戸市民の心の平安を願う土木職人たちの心意気が今でも伝わってきそうだ。



歌川広重作「名所江戸百景」より「月黒元不二」。山頂には富士山と同じく浅間神社が祀られ、毎年6月1日の山開きには大勢の人が富士詣に訪れたという。(所蔵:国立国会図書館)



豊国、広重作「江戸自慢三十六興 鉄砲洲いなり富士詣」。後ろに見える赤い朱塗りの壁が鐵砲洲稲荷神社。その奥に描かれているのが富士塚で、つづら折りの登山道の山頂には浅間神社が奉られていた。(所蔵:国立国会図書館)



鐵砲洲稲荷神社内にある現在の「富士塚」。数度の縮小や移設を繰り返し、今はかつてのように登ることはできないが、7月1日には浅間様の例祭が開かれる。

〔参考文献〕

- 笠間書院編集部「古地図で辿る歴史と文化 江戸東京名所事典」  
笠間書院 2020年
- 竹内誠編「江戸文化の見方」角川学芸出版 2010年
- 棚橋正博、村田裕司「絵でよむ江戸のくらし風俗大事典」柏書房 2004年
- 西野順也「日本列島の自然と日本人」築地書館 2019年